【我が家の冷蔵庫、およびその大小】

2年 松本夏夢

うちの家には、昔から灰色の大きな冷蔵庫が、ただでさえ狭い台所の一角に鎮座していた。

私が生まれる前からだから……かれこれ、二十年以上稼働していることになる。長年連れ添った冷蔵庫と今年の夏の終わり、とうとうさよならをした。

危機感を持ったのは、去年の夏。冷凍庫に入れていたアイスがでろでろに溶けていた時。うちの冷蔵庫は、外気温に負けたのだ。

引っ越しの時以外、どっしりと構えて私たちの食生活を支えてくれた冷蔵庫。私の食べた大概の物は、そこで冷やされていた。だから少し離れがたくもある。

正直に言えば、冷蔵庫の裏や下の不衛生な部分に何が巣食っているかわからず、変色した床板などを見たくない気持ちもあった。例えば動かした途端、黒いなにがしかが飛び出してきたりしないか、と身構えた。

しかしなんにでも別れはやってくる。

だってもうあの冷凍庫では氷一つ作れやしないのだ。

今年に入ってからは、スーパーで袋売りされている氷を買ったりして冷却機能を保っていたが、とうとう厳しい夏がやってきて、お盆までは無理だろう、と余命宣告をしてすぎていった。

冷蔵庫の後ろや床との間には、びっしりと埃がこびりついていた。意外なことに、黒い奴は一匹たりとも出てこなかった。

それがなおさら、私を寂しくさせたのだ。

油やシールの剥し残しでべとついた扉、何を零したのかよくわからない滲みがある野菜庫、そしてなにより、私の片頭痛のために、冷却枕を冷やしてくれた冷凍庫。

最後に何時買ったかわからない冷凍食品――もう冷凍されていなかったが――を吐き出して彼は眠りについた。

お盆が過ぎるころには、背の高い灰色のが退いて、背の低い白いのが来た。

昔馴染みのお爺ちゃんが引退して、まだまだ未熟で初々しい青年が来たようだ。

現在、白くて小さいうちの冷蔵庫は、何とか我が家の空気感に馴染もうと、頑張ってくれている。

彼に一言言いたい。くれぐれも、冷却枕とアイスクリームをよろしく頼む。